

愚頭―ぐず―

作 サカイリユリカ

素舞台上に、波打ち際に打ち捨てられたかのような身体がある。

静かに、川のせせらぎの音。

身体は目覚め、ゆっくりと起き上がり、四つん這いで辺りを見渡す――

光。衝撃。悲鳴。足音。痺れ。

(手に触れて) 在る。どうして、でも、ある

もや。話し声。歪み。痺れ。

右脚・・・在る。生えている。

左も・・・ついている。

(首を一回転させ) ああ、くっついている・・・

身体のあちこちを、確かめるように両手で触っていく。

触れるたびに、そこが「在る」ことがわかる

そこに触れられた感覚と、触った感触、同時に私は得るのだ

身体中に喜びが満ちてくる

また、立ち上がることが出来る

歩くことが出来る

これは、この上ない幸せだ

しかし・・・

何のおいもしない

何も見えない

何も聞こえない

あつくも、さむくもない

不安定になる身体。

ゆっくり自分の顔を手でたどっていく。

耳だ

目だ

鼻だ、

在る・・・

どこもかしこも・・・

立ち上がるうとして、上手く立てずに崩れ落ちる。

(頭を押さえながら) 目の上で火花が散った。  
あまりに眩しくて、面喰った

身を焦がすような衝撃が走って

私は自分自身の重みで、落下していった

時間が止まったように、流れていた

鼻先が地面に近づいていく

風が脇腹をかすめる

何か重いものがぶつかる音がする――

頭のナカを何かがゆっくりと貫いていく

ああ、世界が逆さまだ

おまけに揺れている・・・足首が窮屈だ

爪先が、空を描いた・・・

もう私の脚は切り離されている

・・・頭がふいに、軽くなった

火傷しそうに熱い、

せき止められていた何かがほとばしっていく

固い冷たいものが、当てられている  
身体の真ん中がさらけ出されていく  
空気がどっとまとわりついてきて  
両から引つ張られ、まくりあげられる  
どこへ連れて行こうとしているのだろう  
ぼとぼと落ちていくカタマリ  
白い湯気が立ち込めている  
ああ、腹が空っぽだ

振動が細かく私を揺らす  
右と左が、離れ離れになっていく

——あまりにも手際よく、あつという間に私は私でなくなった。  
いつの間にか、あるべき鼓動はなくなっていた・・・

私は足を滑らせて  
自分を手放してしまった

だがこの身体が  
誰かの、何かの糧になるのならば  
私の生は意味あるものだったではないか  
そのの、何が不満なんだ  
何もないではないか

こうしてまた身体を得たのだから

ふいに川の水を覗き込み、水面に映る自分の姿と対峙する——

ここにいるのは誰だ  
ニンゲンなのか、私は・・・  
どうということだ

川の向こう岸に揺らぐ影を発見する。

向こう岸に居る男は、どこか見覚えがある

あの背格好、それにあの縫い跡だらけの手

(影に向かって) 覚えている、覚えているぞ・・・その手が私に触れたのを私の体を引っ張っていったのを

お前がこんなものを見せているのか

そうだろう、お前が私を・・・私に・・・

ここにいるのはお前なんだろう本当は！！

そうか、そうかそうかそうか・・・

今になってやっと分かった。こちらが何も知らないと思っっているのだろう

あときは、しらなかった

今になって分かったのだ。何もかも、手に取るように

私は自分で足を滑らせたのではない

なすすべなく滑り落ちていくほかなかった

前から引かれ

後ろから押され

足は前へ 前へ 前へ・・・

いったいお前はいくつ奪った？

なぜお前は裁かれない？

そちら側で、何を笑っている！

何も感じないのか

何も考えないのか

仕向けたんだろう

私が自分の意思で落ちたのだと錯覚するように

仕向けたんだろう

その手に何を持っている・・・？

私の身体をどこへやった・・・？

その手のなかで、  
空気にさらされ、ゆっくりと腐っていつてはいないか

身体から切り離されることがなければ、今も活き活きとしていただろうに  
私は私のままでいれたというのに！

そうやってずっと持っているのか

それとも持て余して、どこかに置きざりにするのか

お前は嫌と言うほど知っているだろう、  
知らないとは言わせない、皮膚のあたたかみを

私は腹の中で

何度も新たな身体を育んだ

自分の中に他の誰かがいる

日に日に私と身体を分かち合っていく

しかし

すぐに私の身体と別離していった

泡がはじけ

私は半分になり

また新たな身体の芽を待った

長い間

はちきれ、ねじられ、摘まれ、

すかすかになっていった私

皮がぴったりと私に寄り添い

腹の下あたりばかりが重かった

いつしか

足がたたたなくなった

一歩も動けなかった

私は何も与えられなくなった

ただ身体は欲求に従っていた

背中がむず痒くなり

ひきつりが走っても

私は身体の重みにまかせて横たわっていた

毎日毎日誰かの視線だけが突き刺さってきて

そんな自分を自分も見ていた

陽は毎朝同じ時間に降り注いできたし

それだけが私を支えていた

もう何もない

あとはもう、何も・・・

私はいつしか目を閉ざしていた

どのくらい経ったか・・・

気がついたらどこかへ向かっていた。抵抗するヒマさえなかった

足音。力強い手。揺れる暗闇。

気の遠くなるような時間。

揺れに任せて、私はまぶたの奥で

身体中に響く轟音を感じていた

どこもかしこも痺れていく

そして肉も骨も皮も、鳴き声以外はすべて持って行かれたのだ

何もない、何ひとつ

私が身体を揺さぶっていれば

お前から逃れられたらどうか

お前はその手を止めたらどうか

だが私は知らなかった

知る術ももてなかった

なぜ分からなかったのだろうか

自分自身のことなど、疑う由もなかった

知っていたのは・・・眠ること、食べること、排泄すること、欲情することだけだ

・・・たくさん食べさせられた。与えられたものを咀嚼した。  
それはただの機械的な作業・・・

口にもものが入れば、勝手に唾液が出るように、  
私の歯は何も考えずにすり潰しはじめる・・・飲み下す、またすり潰す・・・

幾度とない食事・・・幾度とない咀嚼

胃が満たされていく

その繰り返しだ

そうして凶体ばかり日増しにでかくなっていく

自分が何を口に行っているのかも知らずに

心地いいか、不快か、それだけだ

私はくずのようになった仲間を受け入れて・・・

そうか、私も何かを支配しなくては生きていけないことを忘れていた

ずっと奥歯で噛んでいると、だんだん消えてなくなっていく

消えてなくなる・・・

いったいこの身体は誰なんだ

どうしてこんなにたやすく手に入ったのだろう

他の身体を手に入れるのは、メンドウだ。意識を奪って、何もわからなくして・・・

でも他の身体を世話する方がメンドウなのかもしれない

私は世話をすることすら叶わなかったが

もっと早く気づいていれば

何か変わっただろうか

知っても、何もすることができないなら、知らなくても良かったのか・・・

いや、それでも私は知っておきたかった

私はただ一つにすぎない。それでも、一つであるのだから

きつとこれからも私には毎日朝が来る

これから、私は誰のもとに生まれるというのだ

何として生まれるというのだ

今までのことは全て忘れてしまうのだろうか

忘れたくない

こんなにも愚かだった自分に気づけたのだから、忘れてはいけないのだ  
お前もそうだろうか？

誰も教えてはくれないのだから、自分で気づくほかないのだ  
気づいて、ずっと覚えていなければならぬ  
何になっても、いつになっても、ずっとだ――

喋りながら、だんだん四つん這いの獣のような格好になっていく――

どこかから声がする

誰かが私を呼んでいる

なんだか身体が軽くなっていつている

どこかへ向かって浮上していく

行っってはいけない

そちらへ私は行くべきではない

行かないでくれ

床を抱きしめるような格好になる。

こっちだ、こっち

(自分の意志と関係ない方向に引っ張られ、動く身体)

まだ、覚えている・・・

ああ頭の中が霞んでいく・・・

つかまえてくれ、早く誰か私の身体を、あっちへ行っってしまう！

早く、早く・・・！

あ、どこだ一体どこに・・・

見えない、どこだ見えない・・・

何もない空間で何かを求めるように手探りしだす。

身体がうごかなくなっていく

どこもかしこも縮んでいく

手はどこだ

足はどっちだ

何もわからない

霧が流れ込んでくる

ああ、どこへ行くのだろう

私は明日になったら何を覚えているのだろう

明日になったら・・・

ひっくり返って、何度か床の上で何かに抗うように跳ねている。

暗転していきながら、獣のような赤子の鳴き声が響く――

終

